

万葉橋



五里ヶ峰、葛尾山（左から）と万葉橋（左岸、堤防道路から）

一般県道聖高原千曲線の起点は、国道18号の戸倉上山田温泉入口交差点。温泉の玄関口である万葉橋は、茶色壁の上山田文化会館や歓迎アーチとともに、県道で戸倉上山田温泉に向かう人のランドマークになっています。河畔には多くの歌碑が立つ千曲川万葉公園や湯の里親水パークなど旅情を誘うスポットも。県道を直進し、城山の急こう配を上がると眼下に温泉街と千曲川が流れ行く善光寺平が望めます。

当所が管理する橋梁を紹介するシリーズ、最終回の第7回は7橋梁の一覧も掲載しています。

1 橋梁データ

路線名 (場所)	一般県道聖高原千曲線 (左岸 千曲市上山田、右岸 千曲市磯部)
完成年月	昭和41年(1966年)3月
橋長・幅員	364.15m ・ 12.0m
構造	9径間 単純合成鋼I桁橋
備考	修繕工事 平成9年～11年



万葉橋から戸倉上山田温泉へ、左は上山田文化会館

2 万葉橋起工・竣工の頃



都市整備計画最後の懸案、万葉橋架設の起工式
(昭和38年10月)「写真集上山田の百年」

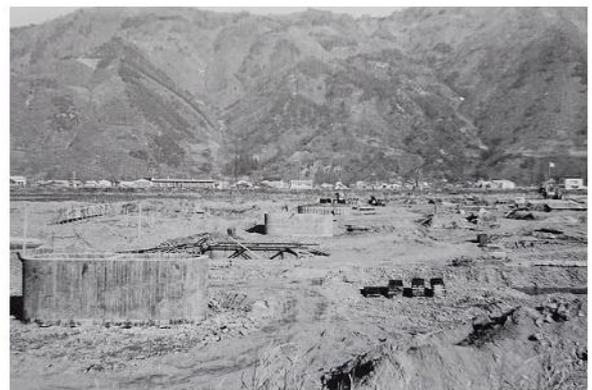
昭和38年(1963年)10月、旧戸倉町と旧上山田町(いずれも現在の千曲市)の都市計画事業と並行して万葉橋の架橋が具体化し、起工式が行われました。2年半の工事を経て、竣工は昭和41年(1966年)4月、事業費は約3億3千万円でした。

この場所に先代の木橋はなく、昭和41年の万葉橋が初めての架設です。この橋ができるまでは、国道18号や鉄道を利用した観光客は、大正橋(昭和

6年(1931年)永久橋化)を渡って入るのが通常でした。昭和35年(1960年)頃から高度経済成長の波に乗って交通量と観光客が増加し、上山田温泉へは年間50万人を超える人が訪れました※。地域の悲願であった万葉橋の竣工により、団体客の行き来や送迎が格段に便利なり、今日まで温泉と地域の発展を支えてきました。

(※ 上山田温泉年間利用者数の状況

昭和35年565,790人、昭和45年725,599人
「上山田温泉株式会社創立百周年記念誌」)

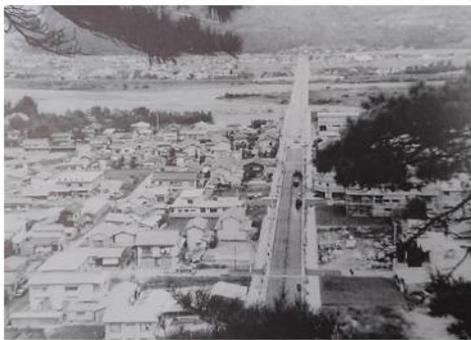


橋脚の建設が進む(昭和39年11月)
「写真集上山田の百年」

昭和41年(1966年)4月15日、待望の竣工式が行われました。当時の上山田公民館報は、「地元、町、県関係者はじめ総勢430人が出席し、見物人も300人程度集まって、正に歴史的な竣工式が行われた。」と報じ、地域の大きな喜びを伝えています。竣工時の万葉橋は、朱色の高欄が千曲川と山々の景観に調和し、夜は水銀灯が灯るなど、観光地にふさわしい斬新な橋と好評でした。



↑ 万葉橋の竣工式(昭和41年4月)
→ オープンカーで渡り初め(同上)「写真集上山田の百年」



↑ 城山からの万葉橋と上山田温泉全景(昭和44年)(科野のいしぶみ 長野県建設業協会更埴支部)

万葉橋竣工当時の戸倉上山田温泉は、昭和42年(1967年)に城山遊園地開園、44年城山にケーブルカー運転開始、さらに45年には千曲川河川公園が完成するなど次々に観光施設が整備されました。また、41年10月から特急あさまが戸倉駅停車となり、旅館の中高層化の進展など活況を呈していきました。

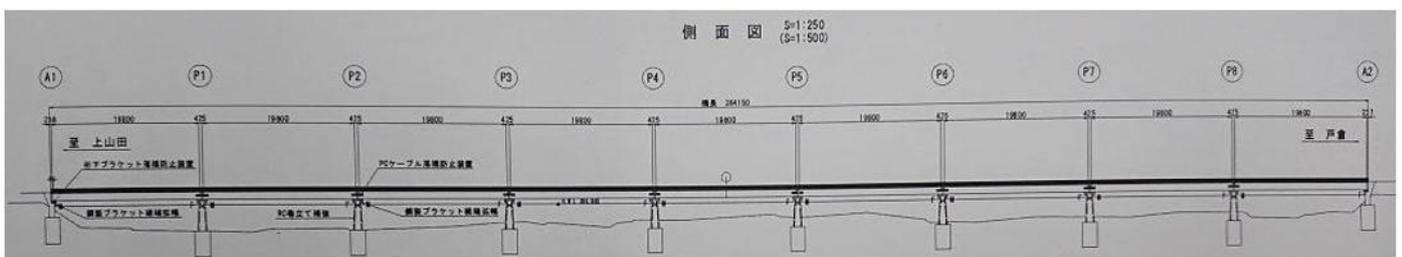


→ 城山からの現在の様子。ホテルなど高層建築も目立つ

万葉橋の構造は9径間鉄格子合成桁、橋脚はケーソン^{※1}10基で当時の近代的な工法が採用されました。鋼とコンクリートの合成桁は、戦後数年の間に主にドイツの影響を受けて導入され、昭和30年(1955年)前後より経済性の優れる新工法として急速に普及したとされています。昭和55年(1980年)頃には建築件数で主要鋼橋の4割以上となりましたが、施工法が煩雑であることや交通量の増加に伴って床版の破損例が出てきたことから、採用例は減少していきました。橋脚は橋軸直角方向ラーメン式^{※2}で、杵状の橋脚が橋桁を支えています。

(※1 ケーソン：地下(水中)構造物等の基礎を構築するために用いる函型又は筒状の躯体)

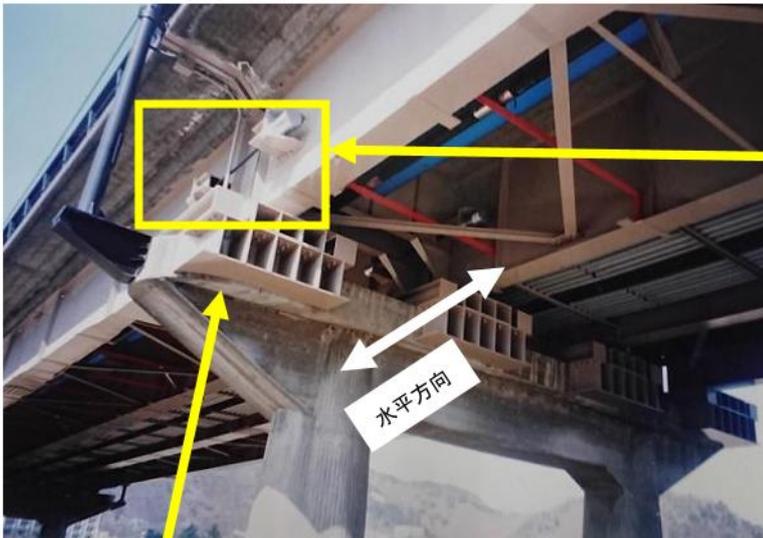
(※2 ラーメン式：構造形式の一つで、長方形に組まれた骨組み(部材)の接合箇所を剛接合したもの)



側面図 橋台(A)2基、橋脚(P)8基による9径間

3 万葉橋の今 ~より安全で安心な橋梁へ

架設から30年を経過した平成9年(1997年)から11年(1999年)にかけて、橋梁の耐震化を目的とした補修工事が行われました。橋脚からの橋桁のずれや落下を防止するために、橋脚に鋼製ブラケット(支持具)を設置する橋脚縁端拡幅工事、桁下へのブラケット落橋防止装置やPCケーブル型落橋防止装置の設置工事を実施。地震に強く、より安全で安心な橋梁に改修されました。



↑橋桁連結部に設置されたPCケーブル型落橋防止装置。両側の防錆キャップ内には、“PC鋼より線”の弛みを防止するコイルスプリングや水平力を緩衝するためのセーフティストッパー(ばね)を内蔵している

←橋脚に設置され、塗装された鋼製ブラケット。水平方向の力がかかった際の連結部の脱落と橋脚落下を防ぐ(平成10年)



←鋼製ブラケットの取付工事。橋脚にアンカーボルトで固定され、設置後塗装された(平成9年)

千曲川万葉公園と温泉サイクリング

信濃なる ちくまの川の さざれしも きみしふみてば 玉とひろわむ

(注釈) 信濃の千曲川の小石でも、貴方が踏んだ石(細石)ならば玉として拾いましょう

昭和25年(1950年)、千曲川河畔にこの万葉集東歌の歌碑が建立されました。佐々木信綱の筆によるもので、銅版に鋳造され自然石にはめ込まれています。万葉橋は、この万葉歌碑に因んで名付けられました。

昭和60年(1985年)、千曲川万葉公園が完成。万葉橋のたもと、左岸に万葉の時代から現代まで信濃を歌い上げた27の歌碑が立ち並び観光客の関心を呼んでいます。



千曲川万葉公園

「科野さらしなの里サイクリング推進委員会」が設定したサイクリングコース、戸倉上山田温泉カラコロ足湯を発着地点とする温泉街ループコースは、全長3.6km、40分かけてゆっくり走れる初級者コースです。万葉橋、千曲川万葉公園では自転車を降りての散策がお勧めです。



サイクリングコースの道標

温泉サイクリング 千曲川サイクリングロードのマップは、千曲建設事務所ホームページからダウンロードできます。

<https://www.pref.nagano.lg.jp/chikukuen/koho/ko-susyoukai.html>

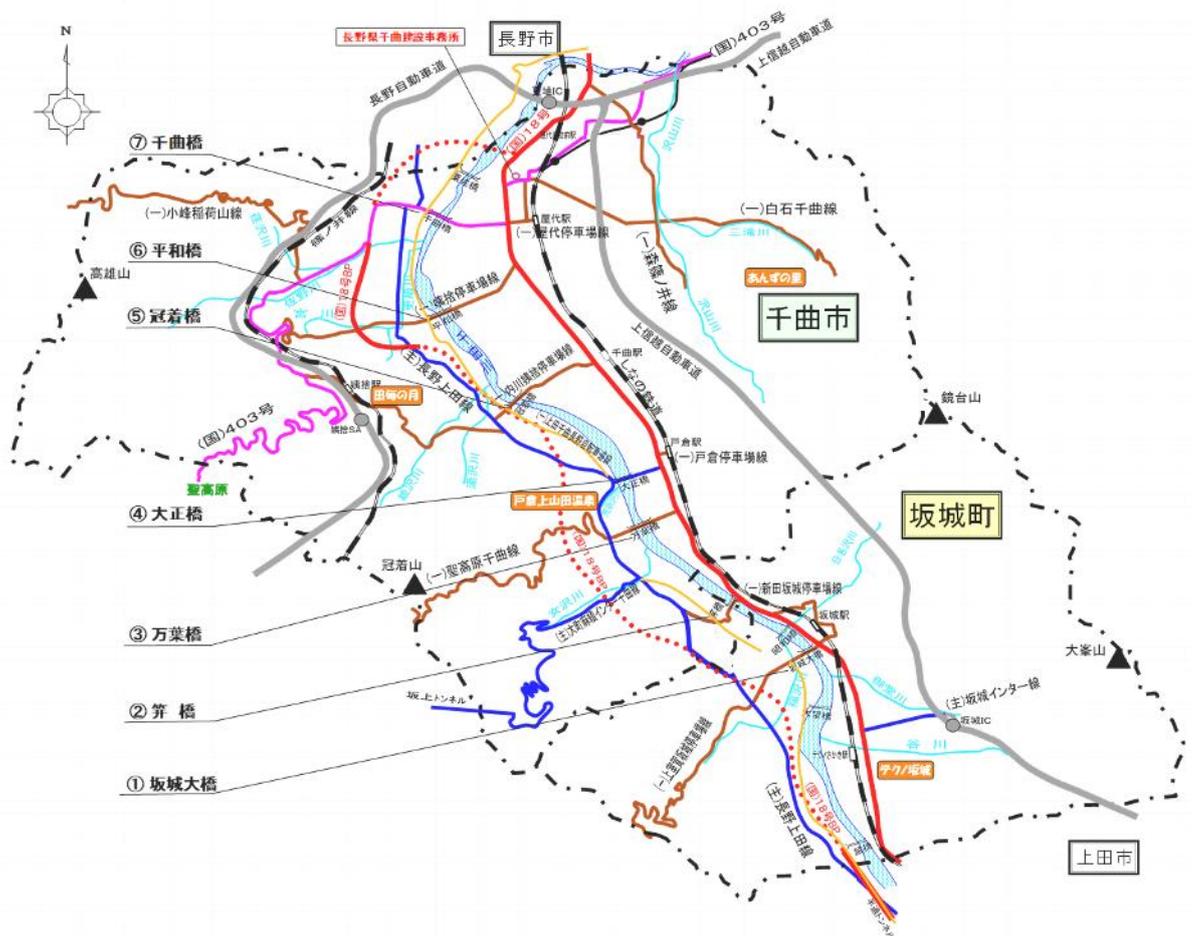
英語版に加えて台湾語版も完成しました。

4 これまでに紹介した7橋梁の概要

N O	橋梁名	左岸地籍・ 右岸地籍	規模橋長 幅員(m)	建設年			特徴
				木橋	永久橋	現橋	
①	坂城大橋	坂城町上五明・ 坂城	675.0 12.0	—	—	昭和62年 (1987年)	管内で最長。土木遺産昭和橋(坂城町管理)補完のため架設
②	筭橋	千曲市力石・坂 城町苅屋原	230.76 4.5	明治22年 (1889年)	昭和35年 (1960年)	昭和59年 (1984年)	昭和35年、全国でもあまり例のない潜り橋として完成
③	万葉橋	千曲市上山田・ 磯部	364.1 12.0	—	—	昭和41年 (1966年)	万葉歌碑に因んだ橋名。7橋のうち最古。市街から温泉へ二本目
④	大正橋	千曲市若宮・戸 倉	345.0 14.0	明治24年 (1891年)	昭和6年 (1931年)	平成14年 (2002年)	戸倉上山田温泉の発展の礎。現橋は大正ロマンがテーマ
⑤	冠着橋	千曲市須坂・千 本柳	475.3 10.75	昭和33年 (1958年)	平成3年 (1991年)	平成26年 (2014年)	増築複数回。平成3年完成の橋は幅員が4段階に異なった
⑥	平和橋	千曲市八幡・中	580.8 12.0	昭和26年 (1951年)	—	昭和60年 (1985年)	古くは武水別神社ゆかりの渡し。平和条約に因んだ橋名
⑦	千曲橋	千曲市稲荷山・ 杭瀬下	402.4 14.3~18.4	大正初期 (1915年頃)	昭和8年 (1933年)	平成8年 (1996年)	タワーと斜張橋が特徴。稲荷山と森・倉科を結ぶランドマーク

※ 番号は上流から

5 橋梁の位置図



■ 出典を記した白黒写真の転載は禁止します。